

身振り頻度の抑制に対する主観的規範・自動性・  
他者からの見えに対する意識と実際の身振り頻度との関係

荒川 歩・木村昌紀・鈴木直人

同志社心理No. 53. 2006抜刷

## 身振り頻度の抑制に対する主観的規範・自動性・ 他者からの見えに対する意識と実際の身振り頻度との関係<sup>1)</sup>

荒川 歩・木村 昌紀・鈴木 直人

Relationship between individual difference on gesture frequency and subjective norm  
in overmuch gesture, care for their looks from others, difficulty inhibiting gesture.

本研究では、身振りの規範に対する捉え方として、①身振りの抑制、②身振りの自動性、③他者からの見えを意識する程度、の3つを取り上げ、実際に生じた身振りの頻度との関連性を、状況要因（対面・非対面）の観点から検討を行う。

### 身振りとその発現理由

日常的な会話場面において、人はしばしば動作を行う。この動作の分類にはさまざまなものがあるが、主に、発話に同期する動作である身振り (Ekman & Friesen (1969) の *illustrator* ; McNeill (1987) の *gesture* または *Spontaneous gesture*) と、身体接触など発話に同期しない動作であるしぐさ (Ekman & Friesen (1969) の *adaptor*) とに大きく分けられる。西尾 (2000) や喜多 (2002) は、前者の身振りを、さらにビートと表象的身振りの2種類に大きく分類している。喜多 (2002, p.25-29) は、ビートを「典型的には上下に (ときに左右に) 刻むように双方向的に小さく動くもので、同期している発話の内容によってジェスチャーの形が変わることがない」動作として、表象的身振りを「身体の一部をある方向に向ける」直示的ジェスチャーと「身体の動きと指示対象との間の類似性に基づいて表現する」描写的ジェスチャーとの2種の動作を含むカテゴリとしてそれぞれ定義している。

この身振りを人が行う理由に関しては、2種の立場から説明がなされている。第1の立場は、

言語化困難な情報を聞き手に伝達する「他者指向性」(Bavelas, Chovil, Coates, & Roe, 1995) に着目する立場である。その根拠として、身振り頻度には状況差が認められること、つまり聞き手が見えない「非対面場面」に比べて、聞き手が見える「対面場面」の方が身振りの頻度が多い (若島, 1996 ; 西尾, 2000) ことがあげられている。この立場では、身振りの発現理由として対人的状況が重視される。対照的に、第2の立場は、身振りは思考の補助的な役割を担う (Rauscher, Krauss, & Chen, 1996) と考え、「自己指向性」(西尾, 2002) に着目する立場である。その根拠として、聞き手が存在しなくても身振りが発現することがあることや、身振りを抑制することで発話や語彙検索が影響を受けることが指摘されている (Rimé, Schiaratura, Hupet, & Ghyssele, 1984)。

### 身振り頻度の個人差・性差・文化差

上述のように身振りは機能的理由に基づいてのみ行われるのであろうか。実際に観察される身振り頻度には、個人差 (西尾, 1995) や性差 (Hall, 1984), そして文化差 (Efron, 1972) の存在が報告されている。このうちの身振りの個人差の原因に関しては、パーソナリティ (Mehrabian & Ksionsky, 1974 ; Duncan & Fiske, 1977 ; Riggio & Friedman, 1983), 認知スタイル (荒川・木村, 2005) および発育環境 (Michael, & Willis, 1968) による影響が指摘されている。これらの報告は、身振りを行って

<sup>1)</sup> 本論が基にしている実験、および計測された身振り頻度は、荒川・木村 (2005) および荒川・鈴木 (2006) と共通である。なお、この実験は第1著者が同志社大学大学院文学研究科在学中に行ったものである。

いる当事者による説明ではなく、観察者の視点からみた身振りの個人差の説明である。

### 身振りの個人差と個々人の主観的規範

他方、荒川(2004, 2005)は、状況や性別によって好ましい身振りやしぐさの頻度は違うこと、その違いは、実際の身振り頻度の性差・状況差と同じ傾向を示していることを指摘している。このことは、人のもつ身振りに対する考え方が実際の身振りの頻度と関係している可能性を示している。このように個々人が持つ身振り観は、外部からの観察などによる客観的測定が困難であり、身振りに対する個々人の主観的規範の1種であるといえる。具体的な予測としては、もし主観的規範が実際の行動と一致しているのであれば、身振りをすることが不適切な非対面場面においては、身振り頻度の抑制に対する主観的規範が強いほど、身振り頻度が少ないと考えられる。

### 身振り頻度の抑制に対する主観的規範とその自動化

身振り頻度の抑制に対する主観的規範と実際の身振りの頻度との関係を検討するに際して、行為と主観的規範の関係について整理する必要がある。Ajzen & Fishbein (1980)は、対象に対する評価的反応である態度と行動に関する「熟考行為モデル」において、主観的規範が行動に影響を与える可能性を指摘している。しかし、熟考行為モデルで扱っている行動は、意思決定を要するような時間的に長いスパンの行動であり、身振りのように時間的に短いスパンの行動ではない。それぞれの状況において、人が毎回、意図を決定して身振りを行っているとは考えにくく、身振りやしぐさは、非意図的(Ekman & Friesen, 1969; 喜多, 2002)、自動的になり、非意識化している可能性もある。また、熟考行為モデルにおいては、周囲の人や集団からの期待が主観的規範に影響すると考えられている。そこで、本研究では、身振り頻度の抑制に対する主観的規範と実際の身振り頻度との関係を検討

するとともに、非意識化、自動化している可能性も鑑み、身振りの抑制の困難さや自動性と実際の身振りとの関係についても検討を加える。具体的な予測としては、身振りの抑制が困難だと感じている人ほど、身振り頻度は多いと考えられる。

### 対人的状況が身振りに与える影響と他者からの見えに対する意識

身振り現象を捉える上で主要な状況要因として、相手から見ることでできる対面場面と、物理的に隔離されて相手を見ることのできない非対面場面といった対人的状況の要因が挙げられる。そのため、本研究では、対面場面と非対面場面の両場面において身振り頻度の抑制に対する主観的規範と身振り頻度の関係を検討する。非対面場面において身振りをすることは、情報伝達という意味では無意味であり、また、聞き手のいないところで、1人で身振りをしながら話しているのは、不適切な行動として受け止められる可能性がある(荒川, 2006)。また、実際の身振り頻度を検討した先行研究(若島, 1996; 西尾, 2000)においても、対面場面のほうが非対面場面に比べて身振り頻度が多いことが指摘されている。実際の身振り頻度と身振り頻度の抑制に対する主観的規範との関係を検討するには、身振りを行うことが好ましい対面場面だけでは十分ではない。身振りを行うことが好ましくない非対面場面においても検討する必要がある。

また、なぜ対人的状況が身振りに影響を与えるのかを考えた場合、他者からの見えに対する意識が身振りに影響を与えている可能性を考えることができる。そのため本研究では他者からの見えに対する意識と実際の身振り頻度との関係も検討する。具体的な予測としては、聞き手から見ることでできる対面場面においては、他者からの見えに対する配慮が高い人ほど身振り頻度が多い。他方、聞き手から見ることでできず身振りをすることが好ましくない非対面場面においては、他者からの見えに対する配慮が高

い人ほど身振り頻度が少ないと考えられる。

### 本研究の目的と仮説

本研究では、まず身振り頻度の抑制に対する主観的規範、身振りに対する自動性、発話時の他者からの見えに対する配慮に関する質問紙について実験参加者に回答を求め、その結果について因子分析を行い、事前に想定した因子が実際に見出されるのかについて検討する。その上で以下の仮説の検討を行う。その際に、規範の影響を受ける程度が高いのは、意識的に統制することが容易な表象的身振りであると考えられるため、本研究では、表象的身振りのみに焦点を当てる。

- 仮説 1-1 身振り頻度の抑制に対する主観的規範の強さと実際の身振り頻度の間には負の相関関係が認められる。すなわち身振りをあまりすべきでないと考えている人ほど身振り頻度が少ない。
- 仮説 1-2 対面・非対面の場面に問わず、身振り頻度の抑制に対する主観的規範が強い人ほど身振り頻度は少ない。
- 仮説 2-1 身振りの自動性と身振り頻度の間には正の相関関係が認められる。すなわち身振りの自動性が高い人ほど身振り頻度が多い。
- 仮説 2-2 対面・非対面の場面に問わず、身振りの自動性が高い人ほど、身振りをする傾向がある。
- 仮説 3-1 他者からの見えに対する配慮と実際の身振り頻度は関係する。
- 仮説 3-2 対面場面においては、他者からの見えに対する配慮の高い人ほど、身振り頻度が多くなるが、非対面場面においては、他者からの見えに対する配慮と身振りとの間に関係が認められない。

### 方 法

#### 実験参加者

心理学関係の授業において同性の友人同士2人1組という条件での募集を行い、それに対して応じた18歳から22歳の大学生35組70名を実験参加者とした（男性32名、女性38名；平均年齢は19.03歳）。なお、募集は、コミュニケーションに関する実験として行った。

#### 実験室の状況

Figure 1 に実験室の状況を示した。参加者2人は向かい合って座るよう教示され、非対面条件の場合には、2人の間に仕切りが設けられた。

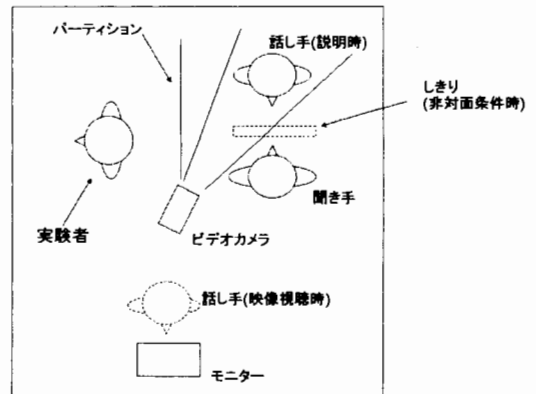


Figure 1 実験室の様子

#### 刺激映像

「トムとジェリー」を用いた。これは、McNeill (1992)が用いる「Tweety」と映像やストーリー構成が似ており、また1964年に最初に放映されて以来、たびたび再放送され、2000年-2001年にも放送されていることから、「Tweety」よりも日本ではなじみがあると考えられる。そのため物語の背景について説明する必要がなく、なおかつその知名度に比して、実際にすべてを見て覚えている人が少ないと考えられるため本研究の目的には適していると判断した。また、本実験ではある程度のジェスチャーを引き起こす必要があるため、課題に用いる映像は、登場人物の追いかけっこを主とし、会話の少ない部分であることを条件として選定した。時間的に完

全に同じ長さであるよりも、刺激映像内で、ある程度物語として完結していることを優先条件として刺激として用いる部分を検討した結果、2分1秒から3分4秒の4場面を実験刺激として用いた。

### 手続き

2名1組の実験参加者のうちの一方が初めに説明者となり、もう一方が初めに聞き手となるようにした。実験者は、説明者に対して、事前に映像についての簡単な文脈の説明を行い、4種の刺激映像の1つをパソコンモニター上で説明者に呈示した。視聴後、実験者は、説明者を聞き手と向かい合う位置に移動させ、映像を見ていない聞き手に対して、映像中に起こったことを詳細に説明するよう教示した。その様子は、説明者の斜め前方に置かれたビデオカメラでひざから上が映るように撮影した。続いて、聞き手だった参加者が説明者となり、同じ手続きを繰り返した。以上の手続きは、説明しているときに両者の間に仕切りがある非対面条件と、仕切りがない対面条件の2条件について双方が両方の条件を1回ずつ、2人で計4セッション行われた。聞き手は、積極的な発言をしないように求められたが、必要に応じて相槌や、説明者の話をスムーズにするための質問を行うことは許された。実験の終了は、話し手が内容を伝達し終えた部分までとした。なおどうしても終わりが想起できない場合は、実験者によって実験は打ち切られた。なお、対面・非対面の順序と呈示する映像はランダムに割り当てられた。また、ビデオ撮影することは事前に実験参加者の了承を得ていた。

全セッション終了後に、実験参加者は、身振りに対する信念についての質問紙に記入を行うよう求められた。その後、実験者がデブリーフィングを行い、参加者からビデオ映像・音声と質問紙での回答をデータとして使用する許可を得た。

### 質問紙

身振り頻度の抑制に対する主観的規範、発話時の周辺への配慮、身振りの自動性については、これまで研究がなされていないため、測定に用いる項目として直接的に参考になる研究は見当たらなかった。そこで、下記のように関連する研究を基に独自に作成した項目を用いた。

荒川(2004, 2005)では、好ましい身振りの頻度を1項目で尋ねていたが、様々な側面から計測して測定の信頼性を向上させるため、本研究では、身振り頻度の抑制に対する主観的規範を測定するための質問項目として、「身振りをし過ぎないように気をつけることがある」「あまり大げさな身振りをするのは格好悪いと思う」「身振りをたくさんしたほうがわかりやすくよい(逆転項目)」を用いた。

セルフモニタリングと身振り頻度の間に関係が指摘されていること(Ickes & Barnes, 1977; 磯・大坊, 2003)に基づき、「他者からの見えに対する配慮」を測定するための項目として、「話していても他人から自分がどう見えるか気になる」、「話していても周りのことは気になる」、「話に夢中になるとあまり他のことが気にならない(逆転項目)」を独自に作成して質問項目として用いた。

また、身振りは、言語に比べて抑制が困難であり、無意識的であることが指摘されていることから(Ekman & Friesen, 1969; 喜多, 2002)、「身振りの自動性」を測る項目として、「身振りの抑制の困難さ」を測定するために、「じっとしていようと思ってもいつの間にか身振りをしてしまう」、「話に夢中になるとたくさん身振りをしてしまう」、「ひざの上に手を固定したまま話すのは容易である(逆転項目)」を独自に作成した。

それぞれの項目は、「非常に」から「全く」までの5件法で回答を求めるものであった。

### 結 果

手続きや録画に不備のあった男性3組、女性1組を除き、男性26名、女性36名に対して、以

下の分析を行った。なお当該刺激映像そのものを見たことがある人はいなかった。

### 身振りの分析

第1著者が映像中の表象的身振りの度数を測定した。両者の分類に当たっては、喜多(2002, p.25-29)にならい、発話と同期しているが、単に「典型的には上下に(ときに左右に)刻むように双方向的に小さく動く」動作ではなく、「身体の一部をある方向に向ける」あるいは「身体の動きと指示対象との間の類似性に基づいて表現」している動作を表象的身振りとして計測した。この際、1ストロークを1回として数え、ストロークの開始位置にむかう動き、およびストローク後に元の位置に戻る動きは1回として数えなかった。分析の信頼性を検討するため、実験についての仮説を知らない第3者が全体の約80パーセントに当たる104試行について実験者と独立して分析を行った。その結果、2人の分析者の一致率は、Pearsonの積率相関係数 $r(104) = .91$ であり、信頼性は高いと考えられたため、第1著者の測定値を以下の分析に用いた。また各セッションの長さが身振りの量に影響すると考えられたことから、各セッションに要した時間を計測し、それで身振りの総度数を割った1分あたりの頻度を以下の分析に用いた。

### 身振りのマニピュレーションチェック

身振りの頻度を従属変数とし、対人的状況(対面・非対面:被験者内:2水準)を独立変数とする $t$ 検定をおこなった結果、非対面条件( $M = 24.371$ ,  $SD = 21.505$ )に比べて対面条件( $M = 37.016$ ,  $SD = 21.201$ )の方が、有意に高い頻度で表象的身振りを行っていた( $t(61) = 4.908$ ,  $p < .01$ )。

### 身振りに対する態度の因子分析と実際の身振り頻度との関係

身振りに対する態度に関する質問紙の回答、全9項目について主因子法プロマックス回転の因子分析を行った。本研究の実験参加者数は62と少ないが、因子分析に必要なデータ数として項目数の5倍から10倍という基準(松尾・中村, 2002)に達していることから、分析には十分耐えうると考えられる。因子分析の結果、Table 1の3因子が抽出された。因子に含まれる項目から、第1因子を「身振りの自動性」、第2因子を「他者からの見えに対する配慮」、第3因子を「身振り頻度の抑制に対する主観的規範」と命名した。

Table 2に因子分析にともなう因子間相関数を示した。相関関係数は低く、これらの因子は独立していると考えられた。

Table 3に、それぞれの因子得点と身振りの頻度との間のPearsonの積率相関係数を示した。「他

Table 1 身振りに対する態度の因子分析(主因子法)の結果(プロマックス回転後)

|                              | 第1因子   | 第2因子   | 第3因子   | 共通性    |
|------------------------------|--------|--------|--------|--------|
| じっとしていようと思ってもいつの間にか身振りをしてしまう | .839   | -.058  | .060   | .707   |
| 話に夢中になるとたくさん身振りをしてしまう        | .741   | -.002  | .010   | .548   |
| ひざの上に手を固定したまま話すのは容易である       | -.557  | .042   | -.001  | .312   |
| 話していても回りのことは気になる             | .153   | .873   | -.068  | .756   |
| 話していても他人から自分がどう見えるか気になる      | -.062  | .701   | .219   | .629   |
| 話に夢中になるとあまり他のことが気にならない       | .212   | -.654  | .111   | .445   |
| あまり大きめに身振りをするのは格好悪いと思う       | .061   | .200   | .806   | .781   |
| 身振りをし過ぎないように気をつけることがある       | .153   | -.093  | .656   | .424   |
| 身振りをたくさんしたほうがわかりやすくてよい       | .400   | .123   | -.591  | .493   |
| 固有値                          | 2.184  | 1.790  | 1.123  | 5.097  |
| 分散の累積説明率                     | 24.256 | 19.889 | 12.478 | 56.623 |

Table 2 身振りに対する信念の因子間の相関関係

|      | 第2因子  | 第3因子  |
|------|-------|-------|
| 第1因子 | -.003 | -.021 |
| 第2因子 | —     | .279  |

Table 3 身振りに対する態度に関する各因子得点と身振り頻度の相関係数

|                   | 非対面    | 対面    |
|-------------------|--------|-------|
| 身振りの自動性           | .326** | .238+ |
| 他者からの見えに対する配慮     | -.011  | -.181 |
| 身振り頻度の抑制に対する主観的規範 | -.227+ | -.057 |

\*\* $p < .01$ , + $p < .10$

者からの見えに対する配慮」と身振りの頻度との間には統計的に有意な相関関係が認められなかったが、「身振りの自動性」と実際の身振り頻度の間には、対面場面では有意な相関関係( $r = .326$ ,  $p < .01$ )が、非対面場面では有意傾向( $r = .238$ ,  $p < .10$ )がそれぞれ認められた。また、非対面条件においては「身振り頻度の抑制に対する主観的規範」と身振りの頻度との間に負の相関関係の有意傾向( $r = -.227$ ,  $p < .10$ )が認められた。

### 考 察

本研究では、身振りに対する態度と実際の身振りとの関係について検討した。身振り頻度に対する態度に関係するものとして事前に設定した3つの態度は、因子分析を行った結果、それぞれ因子として抽出された。このことは、本研究で分析を試みた3つの態度が、ある程度妥当なものである可能性を示す。本論では、これらの態度と、対面・非対面条件における実際の身振り頻度との関係を検討した。

以下では、仮説ごとに考察を行う。

仮説 1-1 身振り頻度の抑制に対する主観的規範の強さと実際の身振り頻度との間には負の相関関係が認められる。すなわち身振りをあまりすべきでないと考えている人ほど身振り頻度が少ない。

仮説 1-2 対面・非対面の場面に関わらず、身振り頻度の抑制に対する主観的規範が強い人ほど身振り頻度は少ない。

実験の結果、非対面場面において、身振り頻度の抑制に対する主観的規範が強い人ほど、身振り頻度は低くなるという有意傾向が認められた。有意傾向であるため、一般化には限界があるが、この結果は、身振りの好ましい頻度の状況差を検討した結果(荒川, 2006)と一致し、身振り頻度の抑制に対する主観的規範と身振り頻度との間に何らかの関係がある可能性を示す。他方で、対面場面においては、身振り頻度と身振り頻度の抑制に対する主観的規範の強さとの関係は認められなかった。これらの結果は、本研究の仮説を支持したとはいえない。これらの結果を、対面場面では非対面場面に比べて身振りをしても良いと思われる頻度が多いという報告(荒川, 2005)を加味して考えれば、身振り頻度の抑制に対する主観的規範が強い人であっても、対面場面においては、自分の身振りの多さに対して寛容である可能性が考えられる。この点を実際に検討するには、対面場面での主観的規範と非対面場面での主観的規範を別々に尋ねて、それぞれの場面での身振り頻度との関係を検討する必要があるだろう。

仮説 2-1 身振りの自動性と身振り頻度との間には正の相関関係が認められる。す

なわち身振りの自動性が高い人ほど身振り頻度が多い。

仮説 2-2 対面・非対面の場面に関わらず、身振りの自動性が高い人ほど、身振りをする傾向がある。

実験結果は、対面・非対面の両場面において、自動性の高い人ほど身振りが多いことを示し、仮説を支持した。このことは、身振りが自動化あるいは非意識化しており、個別場面で、意思決定されているわけではないことを示す。状況に関わりなく、身振りの自動性と実際の身振り頻度の間に関係が認められたが、対人的状況によって身振り頻度が異なることから、社会的アフォーダンス (Costall, 1995), または「ハビトゥス」<sup>2)</sup> (Bourdieu, 1980 今村・港道訳, 1988) と呼ばれるがなされており、状況による自動的な身振りの発現が行われていると考えられる。状況に関わらず、身振り頻度の多い人は、発話場面、または問題解決場面において、からだ的思考 (喜多, 2002), または視覚的な認知スタイル (荒川・木村, 2005) で問題解決にあたる人であるかもしれない。この点については今後検討する必要がある。

仮説 3-1 他者からの見えに対する配慮と実際の身振り頻度は関係する。

仮説 3-2 対面場面においては、他者からの見えに対する配慮の高い人ほど、身振り頻度が多くなるが、非対面場面においては、他者からの見えに対する配慮と身振りとの間に関係が認められない。

実験の結果、対面場面・非対面場面ともに、態度と身振り頻度との間に統計的に有意な相関関係は認められなかった。本研究で捉えようとした「他者からの見えに対する配慮」が身振り

とは関係しなかった。このことは、他者からの見えを配慮することは2つの意味を含んでいる可能性を示す。1つは、他者からの見えを配慮するがゆえに、分かりやすく説明しようとして身振りをたくさんしてしまう。一方、他者からの見えを配慮するがゆえに、身振りを抑制するかもしれない。これらの点を検討するには、その状況でどの程度の身振りが適切であるかも踏まえて検討する必要がある。今後の課題であろう。

### ま と め

本研究では、身振りに対して個々人が持つ規範と身振りとの関係を検討した。その結果、身振り頻度の抑制に対する主観的規範と実際の身振り頻度との関係については一部で有意傾向が認められたに過ぎなかった。他方で、身振りの自動性と身振り頻度に関しては統計的に有意な相関関係が認められた。また対人的状況によって身振り頻度に違いが認められた。荒川 (2005) においては、状況によって主観的規範に違いが認められたことから、その場における好ましい身振りに対する主観的規範は個人内においては非意識化・自動化していると考えられる。

本研究の限界と課題として、3点挙げられる。第1に、本研究で取り扱ったのは、個々人の持つ態度であるため、基準が異なる文化・集団間では比較が困難であるが、このような身振りについての文化が、身振りの文化差・性差などと関係している可能性がある。

第2に、本研究で検討したのは、身振りに対する態度と実際の身振り頻度との間の因果関係ではないことが挙げられる。従って、本論の結果から、態度が身振り頻度に影響を与えているのが、身振り頻度が態度に影響を与えているのかについては検討できない。しかし、態度を実験的に操作するということの倫理的問題を考えれば、本研究で得られた成果は意義があると考

<sup>2)</sup> ハビトゥスとは、思考や行為を生み出すものであるが、日常経験において蓄積されているにもかかわらず、特に自覚されないものを指す Bourdieu (1980 今村・港道訳, 1988) の言葉。



えられる。

第3に、本研究では、身振り頻度の態度の測定を実験直後に行っている。そのため、直前に行った説明課題が、測定された態度に潜在的に影響している可能性は否めない。今後は日にちを空けるなど工夫して検討する必要がある。

以上のような限界もあるとはいえ、身振り頻度の抑制に対する主観的規範が関係せず、規範が非意識化している可能性を示唆した本研究の結果は、身振りが行われる背景を考える上で意義があるであろう。今後も、身振りを行う人が自らの身振りをどう捉えているか、文化的な視点も含めて検討していく必要がある。そのようなアプローチによって、外的に観察することからだけでは解明できない、身振り生起のメカニズムを明らかにしていくことができると考えられる。

#### 引用文献

- 荒川 歩 (2004). しぐさの量についての性ステレオタイプに関する検討 パーソナリティ研究, **13**, 106-107.
- 荒川 歩 (2005). からだ的思考の社会的構築—好ましい身振り量の状況による違いについての分析から— 日本心理学会発表論文集, 1085.
- 荒川 歩・木村昌紀 (2005). ジェスチャー頻度と認知スタイル (言語化—視覚化) の関係 認知心理学研究, **3**, 95-102.
- 荒川 歩・鈴木直人 (2006). ジェスチャーは会話スタイルの一部か? : 発話の近言語的特徴とジェスチャー頻度との関係およびその性差 対人社会心理学研究, **6**, 57-64.
- Ajzen, I. & Fishbein, M. (1980). *Understanding attitudes and predicting social behavior*. Englewood Cliffs: Prentice-Hall.
- Bavelas, J. B., Chovil, N., Coates, L., & Roe, L. (1995). Gestures specialized for dialogue. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **21**, 394.
- Bourdieu, P. (1980). *Le Sens Pratique*, Paris: Les Editions de Minuit.
- (ブルデュ, P. 今村仁司・港道隆(訳) (1988). 実践感覚1 みすず書房)
- Costall, A. (1995). Socializing affordances. *Theory and Psychology*, **5**, 467-481.
- Duncan, S. & Fiske, D. W. (1977). *Face to face interaction: Research, methods, and theory*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- Efron, D. (1972). *Gesture, race and culture: A tentative study of the spatio-temporal and "linguistic" aspects of the gestural behavior of eastern Jews and southern Italians in New York City, living under similar as well as different environmental conditions*. The Hague: Mouton.
- Ekman, P., & Friesen, W. V. (1969). The repertoire of nonverbal behavior: Categories, origins, usage, and coding. *Semiotica*, **1**, 49-98.
- Hall, J. A. (1984). *Nonverbal sex differences: Accuracy of communication & expressive style*. Baltimore and London: Johns Hopkins University Press.
- Ickes, W. & Barnes, R. D. (1977). The role of sex and self-monitoring in instructed dyadic interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 315-330.
- 磯友輝子・大坊郁夫 (2003). 自己の態度に反した説得場面における言語的・非言語的行動の研究 社会言語科学会第11回研究大会予稿集, 67-70.
- 喜多壮太郎 (2002). ジェスチャー：考えるからだ 金子書房
- McNeill, D. (1987). *Psycholinguistics: A new approach*. New York: Harper & Row.
- McNeill, D. (1992). *Hand and mind: What gestures reveal about thought*. Chicago: University of Chicago Press.
- 松尾太加志・中村知靖 (2002). 誰も教えてくれなかった因子分析 北大路書房
- Mehrabian, A. & Ksionsky, S. (1974). *A theory*

- of affiliation*. Lexington, Massachusetts: D. C. Heath & Co.
- Michael, G. & Willis, F. N. (1968). The development of gestures as a function of social class, education, and sex. *The Psychological Record*, **18**, 515-519.
- 西尾 新 (1995). 発話に関する個人差と関連する要因について 日本心理学会発表論文集, 882.
- 西尾 新 (2000). 発話に伴う身振りの発現頻度の個人差に関連する要因 認知科学, **7**, 52-64.
- 西尾 新 (2002). 「発話にともなう身振りの自己指向的機能」研究に関する展望 大阪学院大学人文自然論叢, **45**, 11-36.
- Rauscher, F. H., Krauss, R. M., & Chen, Y. (1996). Gesture, speech, and lexical access: The role of lexical movements in speech production. *Psychological Science*, **7**, 226-231.
- Riggio R. E. & Friedman, H. S. (1983). Individual differences and cues to deception. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 899-915.
- Rimé, B., Schiaratura, L., Hupet, M., & Ghysseleinckx, A. (1984). Effects of relative immobilization on the speaker's nonverbal behavior and on the dialogue imagery level. *Motivation and Emotion*, **8**, 311-325.
- 若島孔文 (1996). 相互作用적ジェスチャーの確証: 相互作用적ジェスチャーと家族療法の関係性について 家族心理学研究, **10**, 91-103.